

ツトメテ考

小林賢章

—

「春はあけぼの。」は有名な『枕草子』の書き出しである。当該段は、この春から始まって、「夏は夜。」「秋は夕暮。」とあり、「冬はつとめて。」と続く。本稿の目的はそのツトメテの意味を明らかにすることである。ということ、そんなことは明白ではないのかと反論を受けそうなので、行論の最初にこのツトメテがどのように訳されて、あるいは、注が付けられているかを、見ておくことにする。本稿はツトメテの意味の措定を問題とするが、『枕草子』本文の注釈理解の面では、春のアケボノとの時間的前後関係が重要となるので、アケボノの注と併せて見ておく。

とは言っても、ほとんどの注釈書のアケボノとツトメテに付けられている注釈は大差がないのが実体なので、ここでは三つの注釈書をそれらの代表として引用する。

まず、アケボノの注釈を見ると、

*夜が明けて、あたりの物の色などが、ほのかに見分けられるようになったころ。「かく遊ぶほどに夜明けぬ。あけぼのになみ居たるに」(天徳内裏歌合仮名日記)。「あけぼののやうやう物の色わかるるに」(源氏物語・橋姫)。「暁をば、たまくしげ、あけぼの、しのめと云う」(能因歌枕)。(増田繁夫『枕草子』和泉古典選書1 和泉書院〈以下「叢書」と略称する〉)

*曙は、空が明るくなり始め、地上は暗さの漂う時刻。(渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系 岩波書店刊〈以下「新大系」と略称する〉)

*曙は明け方、空のしらむころ。「あけぼの、やうやうものの色わかるるに」(『源氏』「橋姫」)。(上坂信男・神坂光 一『枕草子』講談社学術文庫1402 講談社刊〈以下「学術」と略称する〉)

と注釈されている。一方、ツトメテの注釈を見てみると、

*早朝。「夙(ツト、早旦也、ツトメテ)³」(黒川本字類抄)。(『叢書』)

*「つとめて」は早朝。人の生活の始まる時刻。(『新大系』)

*早朝。(『学術』)

といった注釈が付されている。

繰り返すが、『枕草子』の諸注釈書でアケボノとツトメテに付される注は、大概この三者の注釈をでない。ただ、「新大系」の「人の生活の始まる時刻。」の注など、独自の注が見られるものもあるが、例えば、この「人の生活の始まる時刻」という認識は、普通、日付変更時点以降、寅の刻以降ではなからうか。とすると、ここも、ツトメテ

が日付変更時点を示すアカツキと同義ということになり、同意できない。このように小さな差はもちろんあるのだが、大きくは差が見られないのである。

そこで、アケボノとツトメテに付される注を見比べて見ると、アケボノがかなり明確にその時間推移の雰囲気を特定できるのに、ツトメテの方は、「早朝」と漠然とした語が当てられているだけである。少なくとも、ツトメテはアケボノと比べる時、前なのか後なのか、ツトメテとアケボノはどのように違うのかは、注釈として示すべきだと考えるがいかがであろうか。そして、また、このように、明確な注釈が行なわれていないことは、ツトメテという単語の意味指定が、厳密に行なわれてこなかったことに、その因由は求められるのではなからうか。そこで、本稿ではツトメテの時間認識を今一度考えようとするものであり、ことにアケボノとの前後関係の決定を目指して考察するものである。

最後に、ツトメテの語義説明の一として『日本国語大辞典〈第二版〉』のツトメテの説明を見ておく。

①前夜から引き続いた翌早朝。前夜に何か事があったその翌日の早朝。その翌早朝。②早朝。夜明けがた。

のように、ツトメテに二つの意味がある点を指摘した上で、「語誌」として二つの説明が行なわれている。本稿と関わるのはその二つ目なので、それを引用する。

(234)

(2)単に一日のうちの朝早い時間帯を指す場合と、前日からの延長としての翌朝早くという二つの解釈がある。文脈としては前日からの続きとして見た方がいい場合が多い。なお、二日にまたがる場合は、当然日付が変更

されるわけで、丑の刻までを前夜とし、寅の刻以後は翌日となる。

本稿で問題とするのは、まず第一に、ツトメテに本当に①早朝と②翌早朝の二つの意味が存在するかということである。『日本国語大辞典(第二版)』に限らず、ツトメテが二つの意味を持つことは、当然のことと考えられ、それに対する反論は今まで管見に入っていない。しかし、本当に「文脈としては前日からの続きとして見た方がいい場合が多い。」のかを検討する。二つ目は、『日本国語大辞典』の「語誌」に説明するように、ツトメテが早朝(翌早朝であつても早朝である)の意味としても、「二日にまたがる場合は、当然日付が変更されるわけで、丑の刻までを前夜とし、寅の刻以後は翌日となる。」と、ツトメテが日付変更時点と関わるかという点である。先に、「新大系」のツトメテの注についても述べたように、結論を述べれば、ツトメテの時間は日付変更時点とは関わないだろうと予想している。さらに、ツトメテが早朝の意味であつても、日付変更時点と関わないとすると、前日(前夜)が終了して、しばらくして、ツトメテがくることになる。本当に、「文脈としては前日からの続きとして見た方がいい場合が多い。」と断定できるのであろうか。これは、少し考えればわかることだが、アシタと言う単語は、朝という意味から翌日という意味を生んだが、例えばヒルという単語は同じく時間帯を表現する単語だが、翌日という意味は生まれてこない。アシタには生まれ、ヒルに生まれないのはなぜかと言えば、アシタは日付変更時点に隣接していたが、ヒルは日付変更時点と隣接していない点にあると予想されるからである。

日付変更時点と隣接していれば、例えば、アシタの時間を前日から見ると明日となりうるが、日付変更点から離れている単語は、「翌日のヒル」としかいえないのであつて、そこに明日の概念が生じることはない。さらに、今一つ、ツトメテが翌早朝の意味を持ちえないだろう根拠を上げると、ここに引例したアシタが翌日の意味を持つようになるのは、現在では、『平家物語』の用例が最も早いとされている。⁴⁾つまり、平安時代にはアシタは朝の意味

は持つが、翌日の意味は持っていないのである。ツトメテが翌早朝の意味を持っているとすると、同じような変化をしたアシタよりはるかに早く、アシタと同じような意味変化を起こしたことになり、この点でも納得がいかない。以上、ツトメテは日付変更時点と関わるか、翌早朝の意味があるかという二点を本稿の問題点とする。

二

それでは、ツトメテの時間帯の検討に移るが、始めに、ツトメテはどのような時間、何をする時間と認識されていたのかを見てみる。

*「アサモヨヒ」トハ、朝メテ物食フ時ヲ云フ也。(『今昔物語集』卷三十・十四話)⁽⁵⁾

*院の御かたのくこ、つとめても、ひるも、ゆふさりの御ゆつけも、みなこの御かたにてまいる。(『たまきはる』)⁽⁶⁾

の用例から、朝食の時間の認識があったことがわかる。そうした視点で読み直して見ると、

*「朝メテニ調美シテ妻ニ令食ム」ト思テ、棹ノ有ルニ打懸テ置テ臥ヌ。(『今昔物語集』卷十九・六話)

も前二者に加えてよからう。

当時の人が何時頃食事をとっていたかについては、池田亀鑑に辰の刻であると言う説明があり、そうしてみると、この食事のツトメテは辰の刻、日も出て、それもかなり高くなった時間と認識できよう。つまりは、日の出た時間帯がツトメテの一部であると考えられるのである。

ツトメテの今一面を次に見てみよう。

人のもとにはじめてまかりて、つとめて、つかはしける

①常つねよりも起おきうかりつる暁は露つゆさへかゝる物にぞ有ありける（『後撰和歌集』九一三）

これかれ、逢あひて、よもすがら物語がたりして、つとめて、おくり侍をける

藤原おきかぜ

②思おぼひには消きゆる物ぞと知りながら今朝けさしもおきて何なににきつらん（『後撰和歌集』一一三四）

用例の①女の許を「暁」に辞して、ツトメテにこの歌を詠み送っていることがわかる。用例の②は題詞に「よもすがら物がたりして」とある。ヨモスガラは日付変更時点までをいうことは既に述べた。⁹この男は、その後「けさしもおきて」とあるから、ケサになって、霜が地におくように、あなたを置いてきたというのである。アカツキの始まりからアシタ（アサ）であることも述べた。とすると、この歌の興風も前の歌同様に、一晚中語り明かしたあと、アカツキに女の許を辞し、ツトメテに手紙を送っていることがわかる。

当時の一般的な婚姻は、妻問い婚であり、男はヨヒに女の家に出かけ、アカツキに女の家を辞していた。この二つの歌もまさにそうしたことを背景として詠まれているのである。従って、和歌集からこうした用例を上げるのはさして難しいことではない。

アカツキに女の家を辞し、ツトメテに手紙、いわゆる後朝の文を送っていることがわかる。ツトメテの時間は後朝の文を送る時間としての認識があったことになる。

ここで、今少しこのあたりの時間の流れを追ってみよう。女の家を訪れていた男は、アカツキになって、女の家

を辞すことになる。もちろん、その時間は、「おきうかりつる暁」であり、別れるまでに既にかかなりの時間を要するであろうし、それから、男は自分の家に帰るのだから、その帰宅にもいくばくかの時間は必要である。とすれば、アカツキになるのが、日付変更時点であるから、ツトメテが日付変更時点とは関係ないことは了承できよう。万が一、ツトメテが日付変更時点まで（それ以前の場合も含めて）を含むとすると、アカツキに女の許から帰って、後朝の文を「つとめてつかはし」たり、「つとめておく」ったりという表現そのものになりたたないことは容易に理解できよう。つまり、アカツキの少なくとも始まりの時間より後に、ツトメテの始まりの時間はこななければならないのである。日付変更時点から暫くしないとツトメテはこなないのである。ツトメテは食事をする時間、そして、男が女に後朝の文を送る時間という性格を持っていたことは確認できた。

『和泉式部日記』⁽¹⁰⁾からも引例しておこう。

③ 二三日ありてしのひてわたらせたまへり女はものへまいらんとてさうししたるうちにいとまとをなるも心さしなきなめりとおもへはことにもものなともきこえてほとけにことつけたてまつりてあかしつ
つとめてめつらかにてあかしつるなどのたまわせて

いさやまたかゝるみちをはしらぬかな

あひてもあはてあかすものとは

あさましくとあり。

説明もくどいが、「あかしつ」、「あかしつる」は日付変更時点まで宮が式部のもとにいたのであり。その時点で

アカツキになり、宮は式部の家を辞した。「つとめて」になって、

「めつらかにあかしつる

いさやまたかゝるみちをはしらぬかな

あひてもあはてあかすものとは

あさましく」

とある後朝の文が宮から届いたのである。ここでもツトメテは後朝の文を送る時間として使用されている。

三

さて、ツトメテは、食事の時間や後朝の文を送る時間として認識されていた。そこで、いよいよ本題、その時間帯について述べることにする。ツトメテには①早朝の意味と②翌朝の意味があるから、厳密に論理を展開するならば、①早朝の用例と②翌朝の用例を分けてそれぞれ時間帯を検討すべきだが、私には、②翌朝の用例はないとする立場であることと、おそらく従来ツトメテを①早朝と②翌朝と分ける立場の人でも、その時間帯について検討されたこととはないし、おそらく、時間帯は同じと考えていたと推測されるから、ここで、全てのツトメテの用例をその検討対象とする。

- ④ 殿上の宿直姿もあるつとめて、日さし出づるまで（『枕草子』第四六段）
- ⑤ つとめて、すこし寝過ぐし給て、日さし出づるほどに出でたまふ（夕顔⁽¹¹⁾）
- ⑥ 雪のふりたるつとめて

あかねさす日よりさきにもいて、みてきえてくやしきけさのゆきかな（『栄花物語』⁽¹²⁾）

用例の④を見ると日が出る頃までをツトメテと言っていることがわかる。先にツトメテの性格を考えた時に、朝食の時間（辰の刻）と言う事実を考えるとこのことは当然であろうか。それで用例の⑤を見てみると、「日さし出づるほど」がツトメテの「寝すごした」時間であるとの指摘がある。とすると、日の出前の時間もツトメテということがわかる。用例の⑥はそのことを和歌が確認しているともいえようか。

この段階で、ツトメテは日の出より前の時間帯を含み、日の出過ぎまでをいうと確認してよからう。日の出前の薄暮の時間は後で検討するとして、ツトメテの終わりの部分について、日の出以後しばらくの時間をツトメテということは、ツトメテが早朝を意味しているなら、常識として昼近くまでは含まないと考えるから、常識的な範囲として、日の出後しばらくとしておく。

それでは、日の出前はどれほどの時を遡るのであるか。ここで一つの事実を確認する。アカツキはその始まりが日付変更時点であった。これは、時刻制度に基づく基準である。従って、真暗な時間にその開始時間をおくことができた。その時間以後、日の出前までに、時刻制度にその基準を求めることは、ツトメテが時刻と組み合わせ使用されたり、アクなどの動詞と組み合わせられて使用されていない事実をみても、考えにくい。ただ、

⑦つとめて、いととく御格子まゐり渡して（『枕草子』第一〇〇段）

⑧つとめてになりて、（『枕草子』第二二段）

の用例がある。用例の⑦はツトメテに時間的幅があることを示し、用例の⑧は、人はなんらかの理由でツトメテの到来を知りえたのであろう。それでは、日付変更時点以降日の出までの自然現象の変化は何が考えられよう。それ

は、薄暮の到来ではなからうか。薄暮になる時間から日の出しばらくをツトメテと言ったと考えていいのではなからうか。

用例の⑧は「除目に官得ぬ人の家」の話であるが、「(除目が)はつる暁まで門たたく音もせず」の後、「つとめてになりて、隙なくをりつる者ども、一人、二人、すべり出でて去ぬ。」と続くのだが、逃げ帰る人は少しでも早く帰りたいものではなからうか。アカツキは除目の連絡の入る最後の時間であり、ツトメテになれば、もうそうした連絡はない。アカツキの後で日の出前の変化としては、薄暮が考えられるのではないか。そして、その時間帯こそがこの章段を理解する上で大切なタイミングではなからうか。

⑨雨の夜降りたるつとめて、いみじく無徳なり。いととう起きて、「泣きて別れけん顔に、心劣りこそすれ」といふを、聞かせ給ひて、「げに、雨降る気はひしつるぞかし。いかならん」とて、おどろかせ給ふほどに、殿の御方より、侍の者ども、下衆などあまた来て、花のもとに、ただ寄りに寄りて、引き倒し取りて、みそかに行く。「まだ暗からんに、とこそ仰せられつれ、明け過ぎにけり。不便なるわざかな。とくとくと倒し取るに、いとをかし。〔枕草子〕第二六三段)

この章段の時間はもちろんツトメテであるが、その時間はいつごろであろうか。「まだ暗からんに」と命令を受けたのに、「明け過ぎにけり。」の時間である。この部分の表現は、「アケハナル」などではない点注意がある。複合動詞アケハナルはすっかり明けての意味だが、ここは、アケスグ時間であり、まだ薄暮の時間と推定出来る。

⑩人たちのけしきのくらくて見えさらんこそくちをしく侍らへと申しかはつとめてあくるやおそきとはしめさせ

給ひて、(『讚岐典侍日記』¹³)

では、「見えさらんこそくちをしく侍らへ」と言っているのだからツトメテの段階では、視界がきくことは了解されようし、日が出るほどにはなっていないであろう。

⑪あさがほのつとめてばかりはなやぎ(『成尋阿闍梨母日記』¹⁴)

¹⁵

では、朝顔の咲いている時間をツトメテとしている。暗い時間にも朝顔は咲いているのかもしれないが、少なくともその姿が視認出来る前提があるであろう。

アカツキという時間は日付変更時点より後、かなり明るくなる時間帯までを指すとかって述べた。ここにツトメテは薄暮の時間から日の出のあとまでを指すと指摘した。となると、暁の最後の部分とツトメテの最初の部分は重なってしまうことになる。おそらく、平安時代においても、薄暮の始まりあたりの時間帯をアカツキと呼ぶこともあれば、ツトメテと呼ぶこともあったであろう。ただ言葉の理解としては、アカツキは日付変更時点から薄暮の前まで、薄暮から日の出以後までをツトメテと呼んでいたと理解してよいであろう。それでは、なぜそうした矛盾が起こるのであるのか。アカツキとツトメテを連続して使用するとき、人々は語本来の用法を厳密に適用しようとするが。アカツキが単独で使われる場面では、その終了点を明確に言い表さない面があるのではなからうか。こうした時間表現語彙の研究の難しさは、自然現象を捉える捉え方は、個人差の問題があるということなのであろう。

四

ツトメテの時間は薄暮以降であることの確認は済んだ。それでは、最初に戻って、ツトメテに①早朝②翌朝の二つの意味があるかの確認にうつる。ただし、①早朝の意味は既に確認したから、②翌朝の意味が存在するか。しな
 いかの確認に移る。すでに述べてきたように、ツトメテは早朝の意味ではあるが、日付変更時点とは関係しない。
 日付変更時点と関係するアシタでさえ翌日の意味が生じたのは、『平家物語』以降とされていることは述べた。そ
 こで、日付変更時点とこの意味の変更の問題をここで少し整理しておこう。

アシタという語は午前三時以降を指して使用された。午前三時の日付変更時点の後を指す語であった。このアシ
 タという単語を午前三時以降に使用すれば、朝の意味しか生じないが、午前三時より前の時点で使用すると、明日
 の意味が生じる。日付変更時点の前に使用するか、後に使用するかが、アシタという語の派生的な意味を生じるの
 に重要な意味を持っていた。そして、その派生的意味の初出が『平家物語』であった。

それでは、平安時代に同様な意味の派生の例はなかったであろうか。コヨヒという語がまさに同様な意味を派
 生して使用されていた。コヨヒは午前三時までを指す語であった。当然午前三時の前にこの語を使用すれば、当晚
 の意味になり、午前三時を越えて使用すれば、昨晚の意味になる。

ここでもその語が派生的意味を生じるのには、日付変更時点が関係していた。

つまり、本来の意味と派生的な意味を持つコヨヒとアシタという二つの単語はともに、日付変更時点と関係する
 単語であった。ところが、ここで、問題となるツトメテは日付変更時点と関係しない。ツトメテは日付変更時点と
 関係するという『日本国語大辞典（第二版）』の記述には問題があった。その日付変更時点と関係があることが派
 生に大きな意味をもち、それと関係有るアシタでもその派生的な意味は『平家物語』にならないと発生していない。

とすれば、日付変更時点と関係しないツトメテにアシタより早く派生的な意味が生じるとは考えにくいのである。

さらに、ツトメテが平安時代に翌朝の意味をもっているなら、

⑫また翌朝つとめて（『枕草子』第一三三段）

⑬御使つかひ、そのまたの日まだつとめてまいりたり。（『蜻蛉日記』）

のように、ツトメテに「また」や「またの日」のような語が修飾語として付くことは考えられない。ツトメテを翌朝の意味で使用する文脈でわざわざ「又」などの修飾語を付けることは、そのまま、ツトメテが翌朝の意味を持っていないことになるからである。

さらに、次頁の表を見られたい。これは、『枕草子』のツトメテが、最近の注釈書類でどのように理解されているかを、一覧表にしたものである。

(244)

早朝の意味を○で、翌朝の意味を×で表わしたものである。当然のことだが、横には○なら○ばかりが並び、×なら×ばかりが並ぶことが予想されるのだが、実際には、○と×と混在する例の方が多くらいなのである。そして、表の注釈書は左から右に時代順に並べてあるのだが、時がたつ程その混乱が大きくなることも指摘してよいかもしれない。もし、ツトメテに早朝と翌朝の二つの意味が截然とあるのなら、専門家の注釈がこれ程揺れることは考えられないはずである。

番号	用 例	叢書	角川	新潮	学術
1	冬はつとめて (1段)	○	○	○	○
2	つとめて 翌朝、御前に参りて啓すれば (5段)	×	×	○	×
3	あらぬものにいひなしてやみぬる 翌朝 (6段)	×	×	×	×
4	つとめては、やみにたれど (7段)	×	×	○	○
5	つとめてになりて (20段)	×	×	○	○
6	雨うち降りたるつとめてなどは (35段)	○	×	○	○
7	殿上の宿直姿もあるつとめて (46段)	×	×	○	×
8	皆寝て、つとめて (77段)	×	×	×	○
9	つとめて、いととく (100段)	×	×	○	○
10	さて、翌朝はとく起きぬる (105段)	×	×	○	×
11	つとめて 翌朝、蔵人所の (131段)	×	×	○	×
12	つとめて 翌朝いととく (132段)	×	×	○	×
13	つとめて、手洗ひて (133段)	×	×	○	×
14	また 翌朝 (133段)	×	×	○	○
15	除目の 翌朝 (154段)	×	×	○	×
16	つとめて 翌朝、見れば (156段)	×	×	○	×
17	つとめて 翌朝、日のうららかに (263段)	×	×	×	×
18	雨の夜降りたるつとめて (263段)	×	×	×	△
19	つとめて 翌朝来たるを (263段)	×	×	×	×
20	つとめて、例の廂に (277段)	×	×	×	○
21	漕ぎありくつとめてなど (290段)	○	○	○	○

※△は直接の訳がない。

※「角川」は石田穰二訳注『新版 枕草子』

(角川ソフィア文庫 1979年 角川書店刊)

※「新潮」は萩谷 朴『枕草子』

(新潮古典集成 1977年 新潮社刊)

私はツトメテには早朝の意味しかないという主張をしているのだから、表の中で全て翌朝の意味、つまり、×で解釈が統一されている用例を検討してみることにする。そうした用例は案外少ないのである。四本ともに×を打つ用例の3番・17番を検討してみる。

⑭ 暗うなりて、物食はせされたれど、食わねば、あらぬものにいひなしてやみぬる 翌朝、御けづり髪、御手水などまありて、御鏡を持たせさせ給ひて御覧ずれば、げに犬の柱のもとにゐたるを、見やりて、(『枕草子』第六段)

当該ツトメテの前後の本文には、大きな異文はない。さて、右の本文前半「暗うなりて、物食はせたれど、食わねば、あらぬものにいひなしてやみぬる」はある晩の事件である。文の最後は「ぬる」と連体形であるから、これ全文が、ツトメテに係っていくと考えてよいのであろう。そのツトメテは当然日付変更時点を越えたこちら側、つまり翌日に属するから、ツトメテを翌朝と訳すというのが、ツトメテ翌朝説の根拠になっているのであろう。ここらあたりのことが、『日本国語大辞典（第二版）』のいう文脈による解釈なのであろう。では、この文脈はツトメテを翌朝以外に訳せないだろうか。前半の文に「暗うなりて」とあるからこの事件が既に夜に起こっていることはわかる。「夜何々」という事件があつた朝に」という文は成立しえないのであろうか。たしかに、この朝は翌日であるが、この文脈でどうしても翌日がないと文が成立しないかというところではないのである。

⑮二条の宮へ出でさせ給ふ。ねぶたくなりにはしかば、何事も見入れず。翌朝つとめて、日のうららかにさし出でたるほどに起きたれば、（『枕草子』第二六三段）

右の例も同じで、必ずしも翌朝と解釈しなければ理解できないものではないのである。ツトメテは、日付変更時点と関係しない。「又」、「又の」などの修飾語がつくことがあるというツトメテの性格、ツトメテの実際の解釈は早朝と翌朝とで大きく揺れているという事態を考えると、平安時代において、ツトメテに翌朝の意味を持たせるのは難しいと考えられるし、次の時代になると、急速に用例の減少するツトメテという単語が翌朝という意味を持つとは考えられないのである。

ツトメテは薄暮の時間から日の出後あたりを指す早朝の意味を持つ単語であり、翌朝と言う意味は持っていないかっただと言えるのである。

五

さて、ツトメテを薄暮の時間から日の出過ぎ頃まで、今日のまさに早朝と考えられることは、前節までに述べたと
 思う。さらに、女のもとで一夜を過ごした男が、女の家を離れるのがアカツキであり、女の家を出て、自宅に帰
 ると、ツトメテには男から女にいわゆる後朝の文を送る、あるいは、送らねばならない時間であったことも述べた。
 そこで、その立場からツトメテを見るとときある解釈不能だった文が解釈できるようになることを本節では示すこ
 とにしよう。そうできるなら、ここに示したツトメテの解釈が正しいことを証明するはずである。

その一つの文とは、『和泉式部日記』の次の文である。

⑩女はねてやかてあかしついきりたるそらをなかめつゝあかくなりぬれはこのあかつきおきのほとこの
 とゝもをもものにかきつくるほとにそれいの御ふみあるたゝかくそ秋の夜のありあけの月のいるまでにやすらひ
 かねて帰りにしかな

右の「れいの」の解釈を問題にするものである。というのは、右の「れいの」については、平田喜信^⑬や由良琢郎^⑭
 が『和泉式部日記』を注釈した際、すでに問題点を指摘しており、それらを中嶋尚の『和泉式部日記全注釈』^⑮では、
 両者の注をまとめて、「れいの」は『平田影印』のように「やや唐突」な感じがあり、『由良全釈』に「女の立場
 からいったのではなく、物語作者の立場からいっているのである」ともするが、折に触れての心配りを待つ女の期
 待の心情を表した言い方であろう。宮はこの点の配慮を欠かさぬ人であった。」と述べている。

確かに右の文だけを読むと平田が指摘するように、この「れいの」は唐突の感を免れえない。右本文は、「三条

西本」によったが、右の引用本文部分にしても、それは、『和泉式部日記』諸本の性格のせいか、多少の出入りはある。ただ、「寛元本」にしても、「応永本」にしても、この「れいの」は有していることは確認しておく。とする、確かに、今日の視点では唐突に感じる、この「れいの」が『和泉式部日記』が成立、流動している段階では、唐突ととられていなかったことをその本文は示していることになる。例えば、引用本文の冒頭「女はねて」の後に、「三条西本」には「やかてあかしつ」の文が存在するが、「寛元本」にも、「応永本」にもその本文はない。とする、この「やかてあかしつ」という本文を、『和泉式部日記』本文として、ここに置くかどうかは、問題が生じる。

ここは、回り道となるがその問題も解決しておく。本段の前節は帥宮の和泉式部訪問の段だが、そこには「九月十日あまりはかりのありあけの月に御めさまして」(寛元本)とあるのである。この「九月十日」(「三条西本」は「九月二十日」)の記述については多くの議論が行なわれて来たが、佐藤和喜の指摘¹⁹⁾により、「九月十日」の本文がより正しいことが指摘されている。なぜ、この日付が問題となったのかと言えば、「九月十日あまり」に「ありあけの月」が出るかということが問題となっていたからであろう。それを佐藤は、「九月十三日」でも「ありあけの月」というと指摘したのであった。私はこの問題も含め、アリアケノツキとはどのような月をいうのかを考えて、午前三時(日付変更時点)を越えて空にある月をアリアケノツキと呼ぶことを指摘した²⁰⁾。もちろん、佐藤の考えは正しい。それでは、帥宮はいつ和泉式部の許を訪ねたのであろうか。すると「ありあけの月」とあるから午前三時を過ぎていたことになる。その後、「やがてあかしつ」の文がくることは、アカスという動詞は日付変更時点越える意味で使われるから、あってはいけない文なのであり、「寛元本」「応永本」本文はそうした様子を示しているのである。一方、「三条西本」はこの事態を九月二十日あまりととり、「ありあけの月」を、現在はアリアケの状態ではないが、日付から考えて、もう少し時間がたって、朝方になれば、アリアケとなる月と捉えたのであろう。帥宮が和泉式部を訪ねたのは、午前三時前、そしてそのまま「あかしつ」と午前三時を越えた表現を加えたと推測で

きるのである。つまり、同じ『和泉式部日記』であつても、諸本により解釈に差が生じるわけである。ところが、今問題としている「れいの」は全ての諸本に存在しているから、上記の問題は生じない。実はこの文を解釈する時、今一つ諸本に共通して存在する句の存在は重要であつた。それは、「れいの」の少し前、「あかくなりぬれは」という表現である。この句も諸本全てに存在することも指摘されてよい。つまり、「れいの御ふみ」が和泉式部の許に届けられた時間は、「あかくな」った時間だったのである。

そうしてみるとこの「れいの」を、いつもの後朝の文のようにと解釈できないだろうか。

六

最後に、本稿の課題であるアカツキとツトメテの関係をもう一度述べる。かつて、アカツキの時間を指定した際、午前三時から、夜が明けてかなり明るい時間帯までもアカツキと呼ぶことを述べた。本稿でツトメテはいわゆる薄暮以降の時間であると述べた。とすると、アカツキの最後とツトメテの始まりは重なることになる。その説明を再述しておく。一般的にアカツキと言うとき、それは午前三時からまだ暗いうちを言ったのであろう。アカツキに女の子を出る男は明るくなって帰ってはいけなかつたはずである。そして薄明るくなった時間ツトメテに、いわゆる後朝の文を女の許に送ることになる。

さて、こうした時間表現語彙を研究するとき、大きな問題点は、時間表現語彙の時間帯と人間の自然な行動時間は、実際には一致しにくいという事実である。

私は、時間表現語彙の研究によく短歌、それも題詠歌を用いた。それは、題意を歌人は短歌の中に読み込まねばならないから、実際日常では起こりにくいことを和歌に詠んでいくことが多く、すると、語の意味がそのまま表示されることが多いのであつた。ここで述べる人間の行動はそれとは逆で実際には合わないことが多い。もちろん自

然現象でも同じである。「夜一夜降り明かしつるに、けさはやみて」(『枕草子』第一二六段)とあれば、それは第一義的には午前三時まで雨が降っていて、そこで雨がやんだことを意味するが、自然界で午前三時きっかりに雨があがることは先ずほとんどないのである。それをこのように文章にしてしまうと、前記の口語訳のような事態を想定しなくてはなくなるのである。

つまり、私たちが古典を理解する時、一義的な意味とそれよりもう少し広い意味(狭いときはその単語にふくまれるから、概ね大丈夫だが)での理解を持つていなければならないのである。

アカツキは午前三時からまだ暗いうちが第一義だが、それよりより明るくなったアケボノやアサボラケの時間をアカツキという場合が存在するのである。ただ、一般的に、文学を理解するときには、第一義的な理解でよいわけで、最初にもどって、『枕草子』の冒頭部の解釈をおこなうなら、「春はあけぼの」は問題なからう。ツトメテは「冬はうつすらと明るくなったところに」とでも訳せようか。ツトメテは無彩色の薄暮、アケボノは有彩色の薄暮とでも言えようか。

注

(1) 『枕草子』本文は、増田繁夫校注『枕草子』(和泉古典叢書1 一九八七年 和泉書院刊)によった。「叢書」の『枕草子』の本文は、今日多くの注釈書が本文として採用する三卷本系の『枕草子』によっているが、知られているように三卷本系諸本の多くには、当該本文がない。「叢書」でも「底本「冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず」の部分なし。脱落と考えて、東本、能本により補う。」と頭注をつけている。本稿でも、『枕草子』の本文脱落の立場にたつて論を進める。また、以下の『枕草子』本文引用、章段数・章段名も「叢書」による。

(2) 「叢書」では「たまをしけ」と引用している。『能因歌枕』の本文、例えば、歌学大系本では「たまをしけ」となっているが、意味の上から「たまくしげ」の誤写と考えられるので訂正して載せた。

(3) 以下注(1)に引用した本文脱落の注が付けられるが、省略した。

(4) 「清水寺やけたりける朝、「や(ッ)、観音火坑變成池はいかに」と札を書いて、大門の前にたてたりければ、「『平家物語』巻一、清水寺炎上」

「右衛門督これを見て、なみだををさへての給ひけるは、「や、副将御ぜ、こよひはとくく帰れ。たゞいままらうどのこうずるぞ。あしたはいそぎまいれ」との給うへども、「『平家物語』巻十一、副将被斬」の二例が、『平家物語(覚一本)』の用例である。「覚一本」にはアシタの用例が二十例ある。その中の二例が明日の用例であることになる。「平家物語」の段階では、まだ、アシタは朝の意味が一般であり、明日の用法は初発の段階であることがわかる。

(5) 『古今物語集』本文は、「新日本古典大系」による。

(6) 『たまきはる』本文は、鈴木一彦・鈴木雅子編『たまきはる(健御前の記)総索引』(一九七九年 明治書院刊)による。

(7) 池田亀鑑『平安朝の生活と文学』(市民文庫127 一九五二年 河出書房刊)

(8) 『後撰和歌集』本文は、「新日本古典文学大系」(岩波書店刊)による。

(9) 拙稿「ヨモスガラ考」(『アカツキの研究』二〇〇三年 和泉書院刊)

(10) 『和泉式部日記』本文の引用は、中嶋尚著『和泉式部日記全注釈』(笠間注釈叢刊32 二〇〇二年 笠間書院刊)による。

(11) 『源氏物語』本文は、「新日本古典文学大系」(岩波書店刊)による。

(12) 『栄花物語』本文は、高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引』(一九八六年 武蔵野書院刊)による。

(13) 『讃岐典侍日記』本文は、鎌田廣夫・相澤鏡子編『讃岐典侍日記 本文と索引』(一九九八年 おうふう刊)による。

(14) 『成尋阿闍梨母日記』本文は、岡崎和夫著『成尋阿闍梨母日記の研究 再建本文・索引篇』(一九九五年 明治書院刊)による。

(15) 拙稿「日付変更時点とアカツキ」(『アカツキの研究』二〇〇三年 和泉書院刊)

(16) 平田喜信校注『影印校注古典叢書 和泉式部日記』(一九八六年 新典社刊)

(17) 由良琢郎著『和泉式部日記全釈』(一九九四年 明治書院刊)

(18) 注(10)に同じ。

(19) 佐藤和喜著『和泉式部日記の表現』(『平安和歌文学表現論』(一九九三年 有精堂刊))

(20) 拙稿「アリアケ考」(『アカツキの研究』二〇〇三年 和泉書院刊)